

日本書道史

ジェフリー・ヤコブ・ラドニック

起源は6世紀であると考えられている。継体天皇の統治下に仏教が伝えられ始めた。次の欽明天皇は積極的に仏教を促進させた。朝鮮の王国の百済は仏教の主な経路だった。百済王が552年に欽明天皇に仏像や経論などを献上した。次の敏達天皇が百済王に仏教的な健康策を手伝うために日本の仏師と尼僧を献納として送った。

その前の中国影響と当時の朝鮮影響で仏教が日本でさかんになった。当時の経論を判読でいないが、外国の文化が日本に流行しながら漢字の読み書き能力はますます上達していたとみえる。

崇峻天皇の統治下に尼僧が学問的な旅行で百済も中国にも行った。外国の文化の吸叫が顕著に受動的な状態から積極的になった。

飛鳥時代に入った時期に日本は高句麗という朝鮮王国と4世紀に墨を日本へ伝えた新羅という朝鮮王国との関係が友好であった。

当時に聖徳太子という仏教研究者が居た。聖徳の当時の文化が偉大だったのに聖徳の程に博学な人が少なかった。だから、漢字の読み書きはまだ多数の人ができることでなかった。漢字は公の記録や仏教と儒学の経論さえに使われたものであった。漢字を学習することがさかんになっていたのに日本の民族の大部分は漢字の読み書きができなかった。できる人は大体において帰化人であった。

中国では漢時代に建てられた碑が人気になった。やがては日本に伝わられた。聖徳が伊予国に行ったときに漢風の『道後温湯碑』と呼ばれている碑を建設した。元々の構造は残っていないが、真性の漢文に書かれた195字があったとわかる。宇多橋碑の96字、また、多胡群碑の80字に比べたら、聖徳の当時の文化の凄さがわかる。

さらに他の中国と朝鮮の影響という例は元興寺である。元興寺の露盤の起源が書いてある。露盤は残っていないが、寺にある記銘で起源について読める。元興寺塔露盤銘は帰化人が書いたものである。

書では、聖徳が三歳で毎日に漢字を何千も練習して、4歳で書の名人の王羲之の作品を勉強していたといわれている。推古后皇の22、23年目の間に聖徳が『法華義疏』という草稿を撰述した。日本の最も古い書跡である。草稿本であるから、自由に速くかいている。そして、消したり書き直したり書き加えたりしている。字形は偏平でよく整っている。六朝風に似ている。聖徳がじょうずな書家であったとわかるということだけでなく、書が全般的にさかんになっていたもわかる。

曇徴僧が朝鮮から帰国すると朝鮮で習った墨と用紙の作り方を日本に伝えた。以来、紙と墨は輸入されなければならなかったものであった。

それで、当時の第三の重要な事件は588年に百済の鑑盤博士と瓦博士と色々な僧によって元興寺建てられると595年に陽古の彫刻で、606年ぐらいの『法華義疏』の撰述で、610年の墨と紙の作り方の伝えられであった。

618年に高句麗との衝突で中国の隋が滅亡した。後すぐ帰化人だけによって中国の文化を習うことで満足できなかったのも、日本から留学生と留学僧を文化を学習するために中国に派遣された。しかし、当時には中国素姓がない人にとって中国の文化が習いにくかったから、留学生が日本で生まれた帰化人の孫子であった。

中国の次の王朝の唐が日本に強い影響を与えた。旅行しながら遣唐使が中国の書を学習した。帰ってきたら、日本で書を促進した。留学僧と留学生が隋の間に中国に行って、唐のときに帰ってきて、中国の文化や書を教えた。その留学生は隋風も唐風ともに熟練した。

法隆寺金堂にある木製銘は650年に字が刻まれたものである。金属のかわりに木製のものであるから字が刻みやすかった。完全に唐風に刻まれた。筆で書かれたように刻まれている。字は薬師瑠璃光如来の書風のようなものである。ところが、当時は前の王朝の六朝がまだ影響を与えていた時期である。それで、当時は六朝から唐に移行の時期である。法隆寺に献納された48個の観音彫像の中のひとつの銘には『辛亥年七月十日記元々』と書いてある。辛亥年とは白ち天皇2年であると考えられている。しかし、様式は唐ではなく、六朝である。さらに、みつけた銘は『甲寅年三日廿六日元々』と同時に六朝風で書いてある。甲寅年とは白ち天皇5年であると考えられている。両方の書風が同時に使われていたとわかる。

主な遣唐使の吉長丹が唐在に多数の本を書いた。その本で唐の文化を伝えた。

百済の滅亡のときに日本が唐と戦争していたが、唐は攻撃するために海を渡ることができなかった。北から高句麗に攻撃され、西から唐と新羅との連合軍に攻撃された百済は663年に滅亡した。日本の軍隊が百済を助けに行ったが、打ち負かされた。朝鮮から戻って行って、朝鮮に関して支配権をなくなってしまった。しかし、負けた百済人が日本に移動して、日本の文化が帰化人に発展させられた。

670年に戸籍が作られ始まった。だんだん全国的なものになった。漢字を読み書きができる人は必要になった。

奈良時代の和銅天皇3年に都が平城京に移動された。

8世紀の前半に王羲之、欧陽詢、ちよ遂良の書風が愛好された。東大寺という寺とかにある屏風に見える。

731年に聖武天皇が綺麗にうまく書を書写した。書写されたものは字形が端正にして結体は完好である。入念に書いているが、行書のように点画を続けて書いた文字もすくない。端正な字形は初唐の楷書の端正の姿のようである。それは王羲之かちよ遂良の書風と

意味する。聖武天皇は王羲之が愛好したと考えられている

当時に筆は兔毛、鹿毛ありは狸毛で作られた。墨と筆の大部分は新羅から輸入されたものであったが、上質でさまざまな色紙が日本で作られた。

奈良時代に文化がさかんになって栄えた。万葉集という音声の漢字が使われた詩文の本が撰述された。仏教がさかんであった。そして、桓武天皇が政治改革と寺の勢力を強くならせることで日本人の心を変えた。主都を移動させるかどうか考えていた。桓武天皇が都を建てることと東北地方を発展することに努力した。

弘仁時代の嵯峨天皇の統治の最初に薬子乱があった。それから和平と文化が発展した。特に詩文と書が進展した。文化と詩と書の実展は桓武天皇の努力だからものであった。

818年に遣唐使が派遣されたが、船で遣唐使のうに不和があって、喧嘩とか戦いがあったので、遣唐使が派遣されなくなった。公の交通がなくなったのに私の交通が続いていた。唐人が貿易船で来朝した。遣唐使の中止にも拘わらず日唐関係が弱く続いた。天皇、女皇、貴族が唐風を愛好したので、唐風はまださかんなことであった。宴会や式が完全な唐風で行われた。弘仁時代に入って貿易が発展して、中国製のものが日本に連れてきた。そんなものは貴族が欠くこともできないものであった。

弘仁時代に音読と訓読とも両方が使われ始まった。詩が人気になって、和歌が少し人気なくなった。男女でも子供でも作詩した。詩と書の緊密な関係は当然である。

詩の得は書の得である。能書の人を求めるために競技が行われ始まった。能書であった人は利達できた。当時は書が大切に尊重された技である。王羲之の書風に関して人気が復活した。嵯峨天皇も能書であったとわかる。

当時の他の能書は空海という仏教僧である。書の世界を拡大させた。以前は楷書、行書、草書だけであった。空海の能書で3つの新たな様式が生まれた。それはてん書と隸書と飛白であった。残念ながら、それらの先進の技巧的な書風を使う人が少なかったので、さかんにならなかった。ところが、空海と嵯峨天皇と当時の他の能書の橘逸勢は『三筆』という偉大な組である。

弘仁時代の初めに書が都から地方に移った。書を愛好した地方は讃岐国（香川県）である。そこは空海と色々な学者と能書の出身である。

891年の頃の唐滅亡寸前に遣唐使の派遣が完全に止めてしまった。唐の影響があり過ぎて、遣族も遣唐使を外国に送る価値をみえなかった。危なすぎであると思われた。ようやく、10世の初めに唐が滅亡してしまった。日本が藤原時代に入った。

唐の滅亡と派遣の中止で国内の文化が発展した。外国の文化を学ぶ必要はなかった。日本の文化を発展させるのは焦点であった。日本人が中国に行くことは禁止になった。行ける人は巡礼旅の目的のある僧だけであった。しかし、中国の貿易船がしばしば日本にきたので、輸入が続いた。ところが、中国の文化の吸収が受動的にはってしまった。中国の影

響が弱くなった。

それでも唐風はまだ愛好されていた。学校で唐風の詩や書が勉強された。唐風の服が着られた。唐風は日本に残ったが、日本的なものの愛好が新しい絶頂であった。唐の文化が和様にはまるようにされた。鏡や服などの日本的な素朴が愛好された。弘仁時代には漢才だけでよかったが、藤原時代には和魂を欠くことはできなかった。

藤原時代には学问が衰えた。高級の貴族員として生まれたら、必ず上流の地位になる。逆に、貧乏として生まれたら、貧乏性であった。藤原時代の末の頃には学问も貴族階級も衰えた。

当時の詩では中国の文学的な芸術として読まれることなく、訓読で日本のものとしてよまれた。弘仁時代の初めに訓読が使われ始まったが、日本的なものはさかんであったから、訓読がとても発展した。

和様の書が中国風の書より愛好され、尊重された。行書と草書の穏和が楷書の強さより好まれた。藤原時代の貴族にとっては書が詩文や和歌や記録などに必要であった。書が趣味というよりもむしろ必要になった。能書が称えられ、下手な書が嘲弄された。能書のための賞が与えられた。今日の観点から見ると賞が超高級であったとわかる。書が尊重された。

藤原時代には書が贈り物としてあげることがさかんだった。醍醐天皇は宇多法皇の亭子院に行ったときに贈与を2つ贈った。和琴と嵯峨天皇の宸筆である。書の作品と楽器はよく一緒に贈られた。

この時代に女性が作詩をしなかったが、男女が和歌を作った。和歌の発展の結果で仮名が発明された。弘仁時代まで全てが漢字で書かれた。遺族の女性は書と音楽と和歌を教えられた。女性の作品は仮名に限られていたものであった。

物語もさかんになった。当時の物語は海浜の砂粒より多かったといわれているが、散在で無くされてしまった。書も発展した。当時の仮名の例は余り残っていないが、残っている作品は美しくて尊重されている。当時は仮名が多くつかわれていたことである。

1150年代の後半の乱の後に貴族階級がよくなり、武士が勢力を得た。貴族の文化の衰微で書も衰微した。平氏が富を得て、軍事力で民族を抑圧した。前の貴族に軽蔑された武士が公家の地位を取得した。全く逆になった

藤原時代のように源氏物語に描いてある穏やかな服が愛好されたことと同じではなく、平源時代の人々は堅固や力を表わす服が愛好した。書風も『三跡』という『三筆』みたいな偉大な能書組みの小野道と藤原行成と藤原佐理の穏やかな様式から藤原忠通の堅苦しい書風に変わった。

日本は不安の状態であった。地震や台風や火事などはしばしば起した。乱とか内戦も起した。1180年に天皇の寺の東大寺が焼失した。藤原氏の寺の興福寺も焼失してしまっ

た。

やがて、平氏の勢力がなくなった。それに貴族はやるきがなかった。当時は失望の時期であった。文化が物凄く衰えた。学問も衰えた。それで無学の人が上流の地位を取得できた。漢字の読み書きができない人も社会階級を登れることできた。学問の必要がなくなった。詩文は衰え、書もまた衰えた。書はまだ好まれ、尊重されたが、漢字と仮名が書けない人が多かったので、藤原時代に比べることができない。書を完全に軽視した人も居た。

歌手、詩人、能書として有名な藤原忠通が法性寺様を作った。法性寺の殿であったので、彼の書風が法性寺様と呼ばれていた。当時は藤原行成の書風がさかんであった。行成の書風に法性寺様の基礎を置かれたが、法性寺様は堅固で個性である。当時は武士のような考え方であったから、忠通の書風がさかんである。

1192年に鎌倉幕府が設立された。幕府の武士は自分の文化を持っていなかったため、平安京の貴族の文化を採用することに努めた。書がもっと硬式になった。しかし、当時の書が平源時代の書に劣った。

藤原時代には宋と私との関係が行われたが、公との関係がなかった。宋の貿易者が来朝したが、宋に行くことがまだ禁止していた。宋の文化が直接に得た情報のかわりに本や撰述だけで伝えられた。宋の紙は愛好されたが、宋風の書は影響を与えなかった。平源時代に全ては日本的なものである。宋の努力で中国の文化の影響が回復したが、和様に負けた。和様は武士と貴族に愛好されたことであった。宋風は主に禅僧に愛好されたことであった。平氏が宋との貿易で富を得た。平氏と宋の貿易の規模が大きくなった。東大寺が再建されたときに宋風も所々で使われた。

しかし、宋の書風は巡礼で中国に行ってきた禅僧に伝えられた。日本は確かに日本的な国であったが、宋の書風を愛好した人も居た。

平源時代に漢字と仮名が衰えたが、和歌はさかんであった。当時の民族は仮名と漢字を美しく書くことに興味なかったため、書が一般的に衰えた。

鎌倉時代には詩文や学問みたいな文化的なことに興味がある者はほとんど居なかったため、文化を発展させる努力もなかった。当時は発展ということよりもむしろ以前の文化を保存する目的である。新たな書はなく、以前の書風が譲り受けられた。書も、また、衰えた。

相変わらず書は貴族にとってさかんであった。やはり、書は文学とか記録に必要なことであったため、学校が書をおしえなければならなかった。学問は書を欠くこともできなかった。でも、藤原時代のような書ではなく、芸術のかわりに実用的な用具であると考えられた。武士階級がもっと勢力を取ると書の学習が必要になったが、武士も実用的なもの

だけで使った。

当時の書は均一性で好まれたが、鮮やかで鮮麗ではなかった。当時に生まれた書風が急に消えてしまった。基本的に、藤原時代の書が取り戻された。伏見院流を作った伏見天皇は主な取り戻す者であった。

宋との貿易がさかんであった。和様もさかんであるにも拘わらず、宋風の芸術や書の影響がますます強ようになっていた。宋の文化、特に書、の輸入の責任者は禅僧であった。しかし、宋の影響が禅的なものだけにみえるようになった。庶民の日常生活にみつけにくいであった。宋僧が来朝したときに、厳重の生活で日本人に敬意された。それはある程度まで書を発展した。

日元の関係は不安であったのに、僧があちこちと行ってきた。元風も日本に伝えられた。宋元風という宋と元との混成は貴族にさかんになった。当時は文化の取り扱いが禅僧にされたことであったから、禅もさかんになった。禅は論理的なことではなくて説明もされないことであったから、流行した。宋の禅僧によってさかんになった。

室町時代には書が貴族と武士階級と庶民の上流に愛好された。和様の穏やかな点画に対して宋の書風の構成的な強い点画にけん著な移主があった。2つの様式の混成がうまれた。青蓮院流と呼ばれた。室町時代に栄えた書風は世尊寺流と寺明院流と青蓮院流である。平安京では有名な5寺があった。五山と呼ばれた。最も能文家が五山に居た。五山は文化淵藪である。五山の文学が主に禅と儒学に関していた。五山の5寺は天竜寺と相国寺と建仁寺と東福寺と万寿寺である。

1368年には元が滅亡した。明が中国を統一した。当然的に、禅僧が明風を学んだが、貴族がまだ和様を愛好していた。宋風も滅亡した。

足利義満將軍が明との貿易で得たがった。船が互いの国に交通した。中国風がまた人気になった。五山の書風は主に宋と元と明の混成である。五山様と呼ばれた。

夢窓疎石は一山一寧の弟子であった。五山の最高の能書であるといわれる。

一休宗純というのは小松天皇の庶子であるといわれる。夢窓の書風は独特のものである。禅宋の腐敗を侮った。夢窓の書に気持ちや性格がうまく表わされる。当時に愛好され、尊重された。

桃山時代の不安と内戦の時期に源氏物語や古今集などの古典が貴族には復活した。桃山時代のもっとも優れていた書家は本阿弥光悦である。光悦は漢字の書より仮名の書が有名であるが、両方とも優れる。光悦の作品が多数の人を求められ、手に入れた人が保存した。伝統的な持明院流がさかんであった。『三筆』の空海の書風の部分が賀茂流と呼ばれた新たな書風に使われた。

光悦のおかげで仮名は顕著な復活があった。しかし、漢字は偉大な能書家の書風を免れ

ることができなかった。仮名が復活したのに、基本的に漢字が鎌倉時代と室町時代のように実用に使われた。

石川文山が隷書を復活させた。それで、王羲之と『三筆』の書風はまだ尊重されていたとわかる。

桃山幕府のように五山が衰えた。書の質は以前の時代の書に劣悪である。文化と書の中心は前の能書家のような書家を生めなかった。

江戸時代に儒学と詩文が五山僧から儒学に移ったように、書も五山僧から儒者と文人と書家に移った。桃山時代は室町時代から江戸時代に移る過渡期であった。江戸時代が接近すると桃山時代の能書家は亡くなった。新しい能書家が珍しかった。偉大な書家の死亡と桃山時代の死亡も来たといってもよい。

江戸時代は平和の時代であった。相変わらず貴族にとって和歌、書、と音楽がさかんであった。書が栄えたが、以前のようなではなかった。芸術と実用の中にあった。芸術としてやった人が少なかった。

当時は『三筆』より『三跡』が愛好された。出版の流行が書を発展させた。江戸時代には書がさかんであり、また、出版がさかんであったから、名筆劇跡の法帖が度々刊行された。1685年の本朝名公墨宝の上巻には空海、小野道風、藤原佐理、藤原行成、藤原定実、藤原行能の書跡を収め、中巻には伏見天皇、後伏見天皇、尊円法親王、尊道親王、尊鎮親王、尊純親王、近衛信伊、本阿弥光悦の書跡を収め、下巻には松花堂昭乗の書跡を収めている。即ち、道風、行成の書風が主で空海の書風が少し添えられているだけである。これによって江戸時代にはどのような書が尊重させられたかということが大体わかる。

徳川家康が儒学を促進した。出版の盛んで、民族は色々なほんが手にいれやすかった。学問も芸術も促進させられた。幕府が朱子学だけ認めたが、もっと知りたい人が多く居た。儒学の流行の結果で中国風に関して興味が復活した。当時の中国風は元と明に改められた唐風であった。江戸時代の中国風の全部は唐様と呼ばれている。黄はく僧が書と詩文で促進した。良寛が細い点画と書の全風の能力でさかんになった。他には北島雪山と細井広沢がある。相変わらず王羲之の書風が勉強された。心越という明の僧がてん書と隷書を復活させた。少なかったが、飛白という書風ができる人も居た。

再び仮名の書が漢字の書に負けた。漢字の書は仮名のより尊重された。藤原時代には和様の人気で仮名の書が漢字よりさかんであったが、江戸時代の儒学と中国風の流行で漢字が尊重された。江戸時代には仮名のために使われた用紙が室町時代のものに劣ったが、良寛、加藤千蔭、冷泉為恭の書で仮名が少し復活した。

幕府と封建の崩壊と政治の中央集権で日本が物凄く変わった。中国の文化の輸入が軽視

された。江戸文化が愛好されたが、西洋の勢力で和歌と書が衰えた。

詩文と書が最初から密着な関係していた。当時にもそうだった。詩文も衰えた。大正時代には競技や展覧会で書がちょっと復活したが、書が競技的なものになってしまった。

当時に研究はさかんであった。色々な古文が発見されたので、書の興味が少しさかんになったが、書が庶民のかわりに書家に限られていた。

現在は書が実用的ではなく、完全に美術としてみられている。それによって新たな書風が生まれた。以前と同じではなく、個人的な表現は強調されている。それに、今日の書は読まれるものではなく、見られるものだけである。戦争が明治維新よりも日本を変えた。現在は展覧会時代といってもよい。